特15
474

神道大意

大蔵教教会管長
湯谷基守著

明治十六年七月出版

014252-000-6

特15-474

神道大意

湯谷　基守／著

M16

ABB-0587

凡そ人は恩を知り恩に報ゐる心掛け常に怠る事勿れ。されば昔しの賢き人も烏に反哺の孝ありとて烏は受し養育の日数の間は又さらに親を養ひ返すとぞ鳩に三枝の禮ありとて鳩は親より三枝をさがりとまるものぞと教へたり然るを況んや萬物の長と生れし人にして恩をしらずで濟べながら其恩も知らで世を經る輩を人の皮着る獣といふぞ今世の人はおしなべて何のもかりも荒海を遠く隔てし天竺や(佛ノコト)猶大の(耶蘇ノコト)人と吾親と思ひ誤まり慈慕ひ仰ぎ尊み己が身の親の御親の神様の御恩はふつに忘れたり此は抑何の心ぞや其神様の神代より今の末世に至るまで夜晝おしの御守の御恩の中に皆人の先

祖代々安らかに世を經しのみか己が今こゝに斯して物云ふも物云聲を聞くことも口を養ふ穀物も体に纏ふ衣服も命存生居ることも誰れの御蔭と思へるぞ此は年頃その親の神の教の足らざりし故とはいへど恩を着て恩とも知らず子として親をも法らず人の皮着たる獸は此世にていかに富貴に暮すとも其の産の子や家門や其靈魂の行末の報ひのほどぞ恐ろしき人が初めて母親の胎内に宿りし其日より ギヤッと此世に生れ出て斯して此世にある内も死たる後の事までも御世話下さる眞實の親神樣の綿津海の海より深く足引の山より高き御苦勞の御恩のほどの荒よしを摘みてこゝに諭すあり是迄耳に聞持たる他所の教や疑ひの心をさつぱり打捨て本の心に立歸りよく聞て忘れず

に人たる道を勉むべし

一此の天と地を造り空氣を充し春秋の氣候を整へ萬物の造化の本を掌り玉ふ天御中主大神と高皇産靈大神神皇産靈大神にて此三柱の神樣を造化の三神と申し奉る

あり

一夫婦交合の道を始め玉ひて國を生み島を生み尊き神々を生玉ひ青人草とも生玉ひて國土人類の元祖と成り玉ひしは伊邪那岐大神伊邪那美の大神にて世にお多賀樣と申し奉るは此の二柱の神樣の御事なり

一空氣を流動して風とおし人畜呼吸の息までも守り玉ふは級津彦神級津姫神と申して今大和の國龍田の立野に齋かれ玉ふ神樣あり

一火を掌り玉ふは火産靈神にて。天地の萬物ことゞく。火氣を含み有たるは、皆此の神樣の恩德なり。此神樣を。世には。愛宕樣とも申し奉るなり。

一金を掌り玉ふは金山彦神。金山姫神にて。國土萬物の締り固まりたるは。皆此の神樣の恩德なり。

一水を掌り玉ふは水波能賣神にて。國土萬物悉く。水氣を含み有たるは。皆此の神樣の恩德なり。

一土を掌り玉ふは埴山姫神にて。天地の萬物悉く。此の神樣の神德を蒙らざるものなし。

一母の胎内に人体を結び成玉ふは。高皇産靈大神なり。

一其の人体に靈魂を授け玉ふは。神皇産靈大神なり。

一此の世に照臨まし〳〵て。萬物を生じ玉ふは天照大御神

なり。

一堅氷とけて水と流れ。海潮滿涸して魚鼈を生じ。雲霧上りて雨と降るも。大御神の神德なり。

一君臣の道を定めて。世界に無比の國體を立玉ひしも。大御神にてましますなり。

一天下を安國と治め玉ふべき政道も。大御神教へ玉ひしなり。

一今の明治の天皇樣に。大御神より百廿七代の。御正統にてましますなり。

一此の世界に降り玉ひし。最初の天子樣と遍く杵命と申し奉りて。天照大御神の御孫君に當らせ玉ふ。御方なり。

一其の時數多の御供の中にて。天兒屋根命。天太玉命。天宇受

寶命。石凝姥命。玉祖命を。五伴緒神と申し。其外頭立たる神々れ。天忍日命。天村雲命。天忍雲根命などにて。世にゝ此の神々の御末の人いと多し。

一其時天の八衢に出迎ひて。先導し玉ひしは。猿田彦大神なり。

一五穀の種や。牛馬や。蠶や桑の出來初しゝ。豐受姫神の神德なり。今伊勢の外宮に鎮り玉へり。世に稻荷樣と申し奉るも。此の神樣の御事なり。

一粟稗豆麥を。陸田種子とし。稻を水田種子と定め玉ひて。世に耕作の業を敎へ玉ひしゝ。天照大御神なり。

一養蠶製糸の業を敎へ玉ひしも大御神にてましますなり。

一機織衣縫の業を敎へ玉ひしは。天棚機姫神。天羽槌雄神なり。

一家を建る事を初め玉ひしは。手置帆負神。彦狹知神なり。此を大工の祖神とす。

一文字を作りて物記す事を始め玉ひ。又學問の道を守り玉ふは八心思兼神あり。學校の生徒など。尊信すべき神樣なり。

一鍛冶の業を始め玉ひしは石凝姥神。天目一神なり。此を鍛冶職の祖神とす。

一玉と作り玉ひしゝは玉祖神なり。此を玉造師の祖神とす。

一神樂を始め玉ひしは天宇受賣命なり。能狂言猿樂や。芝居狂言。戲歌や。舞や踊や淨瑠理に。拍子合せて玩ぶ。琴三味線小弓の類は。皆此時の遺風なり

一君に仕へ。親に仕へ。出入の諸人に睦び親み。心荒々しき人を和らぐる事に幸へ玉ふも。天宇受賣命也。されば女の身と生れて。他人の家に往き。他人の親を親とし仕へ。他人の家を治むる人は。殊に此の神を尊信ずべし。又其家業に依りて。諸人の愛敬あらん事を思はむ人は。殊に此神の神徳を仰ぎ念ずべき事なり。

一天の下を經歷して風土人情を察玉ひ。惡神邪神を退治し玉ひしは。須佐之男大神なり。世に氷川明神と申し。又祇園牛頭天王などと申し奉るも。此の神樣の御事なり。

一天より諸〻の木種を持降りまして。國〻に蒔散し玉ひしも。須佐之男大神と。其御子五十猛神なり。

一歌よみ始め玉ひしは。伊邪那岐大神。伊邪那美大神と。須佐之男大神なり

一五穀豐熟を守り玉ふ。大年御年若年の三柱の神樣なり。此れは農家の人々。信仰すべき神樣なり。

一雨を程よく降らしめ玉ふ。天水分神。國水分神なり。又預りて高靈神。闇靈神も。掌り玉ふなり。これ貴船樣の御事なり。

一竈を築て煎炊する業を敎へ玉ひしは。奥津彦神。奥津姫神なり。この二柱の神に。火の神と合せ祭りて。竈所の神と申奉るなり。世に三頭ある。怪しき狀の像を祭りて。三寶荒神と申すは。甚じき誤なり。

一井を堀りて水を出し。其用るべき法を敎へ玉ひしは。生井。榮井。綱長井として。三柱の神樣なり。此神樣に水波能賣神と

鳴雷神と合せ祭りて。御井神と申奉るなり。

一八物の住居せらるゝよふ。此國土と造り固め玉ひしは。大名牟遅神。少名彦神。又其國々の國魂の神樣なり。

一則てまた大名牟遅神。少名彦神は。西洋諸國にも渡り玉ひて。かの國々をも造り固め玉ひ再びこの御國に歸り玉ひしゝ。文德天皇の齊衡三年二月なり。

一吉凶禍福を卜問ふ術を始め玉ひしは。皇產靈大神と。八意思兼神なり

一山を掌り玉ふゝ大山積神なり。今も伊豫の三島にます神なり。

一海を掌り玉ふゝ大海津見神にて。今も筑前の志加島にます神なりつ

一川を掌り玉ふゝ瀨織津姫神なり。

一野を掌り玉ふゝ野槌神なり。

一水門を掌り玉ふゝ速秋津彦神。速秋津姫神なり。

一木を掌り玉ふゝ久々廼知神なり。

一草を掌り玉ふゝ草野姫神なり。

一家と守り、玉ふゝ屋船神なり。

一諸の妖魔を是より來なと守玉ふゝ。八衢比古神。八衢比女神、久那斗神にて。此三柱を塞神と申して。惡疫流行の時など。殊に齋ぎ祭るべき神樣なり。

一諸の穢を清め。罪科と祓ひ除きて。世の幸福を受けらるゝ身と成下さるは。瀨織津姫神。速秋津姫神。息吹戸主神。速佐須良姫神にて。此四柱の神樣を。祓戸の神と申奉るなり

一犯罪を糺し玉ふ刑法ハ。八百萬の神々様の。謀り定め玉ひしを始めとす。

一反逆人と誅伐する軍法を始め玉ひしハ。天津神々様なり

一武術に勝れさせ。玉ひしハ。常陸國鹿島宮に鎮り玉ふ武甕槌神と。下総國香取宮に鎮り玉ふ經津主神なり。されば撃剣の道場などには。必ず此二神を祭りて尊信すべし。

一大力の神様ハ天手力雄神なり。角力取など。常に篤く尊信すべし。

一月日の來經を記して。時候を計り。農時を授くる暦法を始め玉ひしハ。安房國安房社に鎮り玉ふ天太玉命なり。此れ忌部氏の祖神なり。

一幣帛を捧げて。天の岩戸に籠り玉ひし。天照大御神の御心を慰め玉ひしハ。右の天太玉命にて。其時祝詞を奏し玉ひて。大御神の御心を感かし。天の岩戸より出し奉り。其他種々の功績を立玉ひ。神事の宗源をも掌り玉ひ。且天孫供奉の長として。天上より此國に降り玉ひて。今も河内の牧岡。又大和の春日社に鎮り玉ふハ。天兒屋根命なり。此れ藤原氏の祖神なり。彼の眞宗の一派を開きて。見眞大師と云ハる、人も。此神様の末葉なれば。流石に敬神の道は存知せり。然るに末葉の僧侶信徒なども。此義を知らぬ者あるにや。敬神する人を見て。却つて否な事のよふ思へる者多かるは。甚じき心得違なり。

一醫藥禁厭の法を始め玉ひしハ。神皇産靈大神と。大名牟遅神少名彦神なり。是れ醫道の祖神なり。世に藥師様と申奉

るゝ此二柱の御事なり。

一安産を守り玉ふゝ。富士淺間社に鎮り玉ふ木花咲那姫神なり。世にゝ此を知らずして。子安の觀音あゞ云ひて寂滅爲樂の佛に向ひ。吾子の安産を祈るといふゝ。大なる門違ひなり。

一長壽を守り玉ふゝ。伊豆國雲見嶽に鎮り玉ふ。岩長姫神なり

一命乞の神樣ゝ。大和の國の香山の。畝尾にます澁澤女神なり。

一酒を造り玉ひしは。少名彦神なり。世に粟島樣と申奉るは此神樣の御事なり。

一船を造りて。海を航る術と敎へ玉ひしは。須佐之男大神なり。世に船玉樣と申奉るゝ。此神樣の御事なり。

一船路の安全を守り玉ふは。攝津の國住吉の社に鎮り玉ふ。表筒男神。中筒男神。底筒男神なり。

一陸路の安全を守り玉ふゝ。阿須波神。波比岐神なり。世の人。旅立する時は。住吉の大神と。此二神とを齋ぎ祭りて。海陸の安全を。祈り申すべし

一漁獵を始め玉ひしは。火須勢理神なり。其道を業とする人は此の神樣と海神とと併せ祭りて海上の利得と仰ぐべし。

一山獵を始め玉ひしは。日向國鵜戸宮に鎮り玉ふ。彦火々出見大神なり。

一背より村里と分持ち玉ひて。各その村里内の。一切の幽事

を總掌り玉ふゝ。産土大神なり

一人の善惡邪正を視玉ふゝ産土大神と。天津神國津神。八百万神々様なり。

一此國土と天孫に讓り申して。永く出雲の大社に隱れ鎮りまして。幽事の本を掌り玉ふは。大國主大神なり。世に大黒様と申奉るは。此神様の御事なり。

一人の死たる靈魂を率ゐて。幽事の本を掌り玉ふ。大神の御許に參出て。此世におしたる。善惡邪正を。具に申上るゝ。産土大神なり。

一産土の大神の。申上たる御詞は。人の死たる靈魂の。尊卑苦樂の遠長に。分れ定まる初なり。

一人たる者は。常に能く。此理と思ひ辨へて。恩を知り。恩に報

ゐる事を忘れず。神の冥覽を恐懼て。仮初にも。邪惡の行ひあるべからず。人の見ざる所も。人の聞ざる處も。神はいつも照覽ましますものぞ穴畏々々

上の件は只肝要を記すのみ。此書を讀て。疑の心起りたるは。やがて。道の奥義に分けいるべき。門口なりと。心得て。其疑ひの心を捨閣す。深く思ひ考へて。尚疑ひのはれざる時は。世の物知り人に問糺して。己が本心の明鏡に。照し辨ふべきもの也

明治十余五とせといふとしの神祭る卯月の

はしめつかた信徒らの需によりて

大講義　湯谷基守　謹てえるす

明治十六年七月十四日出版御屆
同　年同月　出版　〔定價五錢〕

著者兼出版人　大分縣平民　大講義　湯谷基守
豐前國下毛郡湯谷村第八百七十五番地住

發賣元　豐前國中津新博多町　書林　野依暦三

十八